



Veritas No.12 (2000.10.12) 創立125周年記念号

目次 (敬称略)

<KC125周年と図書館>

濱下昌宏

<同窓生特集> 創立125周年に寄せて

中條順子 黒瀬百合子 新野緑 岡林典子 徳重育子

<情報化社会における読書の楽しみ>

柏木隆雄

<研究室から>

谷 祝子

<Veritas 図書コーナー開設期間延長についてのお知らせ>

無断転載を禁ず

<KC125周年と図書館>

濱下昌宏 図書館長 総合文化学科教授

125年の歳月は、べつに本学のみならず、自然に経過する。歴史の古さが自慢できるとしたら、時の流れを無為に過ごしたわけではないと、礼儀作法や高尚な趣味判断や知恵・制度・財産の充実振りを、自他ともに認めることができる場合に限る。では、本学図書館についていうと、どうだろう。残念ながら、費やしてきた長い年月の割には蔵書数は多くはない。むしろ、本学のような学生数の規模としては比較的充実している大学図書館であるといえる。しかし、冊数や蔵書の質などの点では、同程度の規模の他の女子大学と比較して、はたして“さすが125年の歴史”と誇れるものかどうか、こころもとない。今後の我々のいっそうの努力が必要である。

つぎに、図書館が抱えている時代の変化への対応という点から見てみよう。かつて、図書館は大学の魂のようなものであった。学問を志す者は、訪れた大学の図書館を見れば、その大学の質が一目でわかるものである、ちょうどひとさまの家を訪れて主人の蔵書からその人の教養を知るように。時代が変われば、たしかに図書館も書物も変容する。図書館は大学の魂である必要がなくなって、久しい。そうなった原因のひとつはパーソナル・コンピュータの普及である。パソコンの前に座るだけで、インターネットのおかげで居ながらにして図書館を利用するような情報の検索が可能になった。もう一つの原因は、コンピュータ化とも関連するが、本の意義、読書の意義が変質したことである。そこで図書館は、情報集積の場や建物としてだけでなく、情報受容の形態としても変容を余儀なくされてきた。インターネットやデータベースの利用が情報受容の主たる手段となりつつあるとき、図書館は文字通りの「図書」の「館」ではない。場合によっては、将来は図書のない館にもなり得る。書物を読むという行為は無くなるのであろうか？ かつて十年ほど前に、藤森照信氏（東京大学教授、建築史・・・12月12日に本学で講演会を予定）は本学の図書館を訪れ、そこで読書に集中している学生の姿を見て、感動の余り（？）「現代の宝物」と表現した。（藤森照信『建築探偵神出鬼没』朝日文庫、p.160、参照。）街の繁華街で見る女子大生はネは明るいが目には光がなく、東大の図書館で見る女子大生は目に光があるがネは暗い、としたうえで、藤森氏いわく「神戸女学院の図書館には、目の光とネの明るさの両方が調っている」、と。たしかに、浮世絵や西洋美術史のなかに「読書する女性」を主題とする絵画があり、実際、ひとり沈黙して読書に没頭する女性像の近寄りがい美しさは私たちを独特に魅了する。では、今日、パソコンのモニターを見つめて熱中する女性は、その研究熱心さと追究心の集中力の姿により、私たちに美的感動を与えて芸術の主題となり得るのか？ 私にはわからない。本学図書館がいかにか情報センターとして変化し発展しようとも、読書する本学の美しい学生を見たいと願うのは、図書館業務に関係する私だけのはかない思いなのであろうか？

☆☆☆『建築探偵神出鬼没』閲覧ご希望の方は本館閲覧カウンターにお申し出下さい。(C42)

<同窓生特集> 創立125周年に寄せて

創立125周年を記念して同窓生のみなさんに母校・神戸女学院に寄せる思いを語っていただきました。

中條順子（保66）

「岡田山の青春」



糸らんの咲く中庭より図書館本館を望む

第2次世界大戦の戦中・戦後に過ごした私の岡田山での学園生活は、他の時代にはない独特のものだった。まず、昭和16年(1941年)高等女学部へ入学試験を受けた時は、筆記試験ではなく、内申と口頭試問だけだった。そしてまともな成績通知表をもらったのは3学年の終わりまでで、4学年は工場へ勤労奉仕に通い、勉強もできない有様。しかも私は父の軍務の都合で4学年の3学期のみを残して姫路へ転居、県立女学校へ転校し、またあちらで工場へ通う日々。当時5年制だったが、私たちの学年だけは4年でくり上げ卒業となった。なんともひどい時代だった。

そして敗戦、—— 私は長野市でそれを迎えたのだが、再び阪神間に戻って女学院の専門部に入り勉強を続けることを当然のように考え、真剣に受験勉強をした。そして昭和21年(1946年)専門部家政科に入学。高女部時代のクラスメイトは殆ど1年上の学年にいたが、やはりいろんな事情で次の年度に入学した級友もかなりいた。

こうしてようやく明るい青春の時代を過ごすことになった。物は乏しくても、若い私たちは夢と希望にみちあふれていた。もちろん、将来にくりひろげられる人生への不安もかかえていたが、それで悩んだり、友人と語ったりすることも今から思えば青春の特権だった。

結局、高女部は卒業していないのだが、私の中ではそれ以外になく、クラス会のメンバーとしてずっと交わりは続いている。

1995年、この高女部の卒業50周年を記念して文集を出すことになり、地震など影響してようやく2年後の1997年、『卒業五十周年 私達の記録』が出来上がった。それを読むと戦時下の日本でわが神戸女学院がどのような環境で、どのような教育を行ったか、また私たち生徒がそのなかでなにを感じ、どのようにして成長していったかが、生々しく手にとるように分る。興味のある方は一度手にとって読んで頂きたい。

私の手許に残してある成績通知表も、その時代を反映していて、専門部時代（つまり戦後）のそれは茶褐色に変色したザラ紙に謄写（とうしゃ）印刷して授業科目が書かれてあるが、それもところどころかすれて見えないようなしろものだ。そこへ先生が手がきでAとかB+とか書き込まれたのだ。今では想像もできないだろう。

家政科は物理・化学等の理科系の授業もあったし、社会学・心理学・教育学などはじめて出会う学問の世界もあった。

図書館へも時折足を運んだが、なんとなく犯しがたい聖域のような印象がある。

中庭は授業の合間の憩いの場であった。糸らんの白い花が咲くと夏休みが近づいていることを知らせていた。それは今も変わらない状況だろうと思う。

女学院百年史が発行されて、ぱらぱらと頁をめくって読んでいておどろいたことは、私が岡田山での生活をはじめた昭和16年は、キャンパスが岡田山へ移転（昭和8年）してまだ8年しか経っていない時だったということである。私のその当時の印象は、もう相当年月を経て落ち着いた貫禄を示しているように思われたのだった。

こうして書いていると、だんだん思い出されて、授業を受けた先生方の声色、校舎のベルの音、匂い、友人の顔など、次々と浮かんでくる。

チャペル・アワーや友人とのかかわりを通して、未知の大人の世界への経験を深めた青春時代、それを岡田山で過ごしたことは、今も続く友人との交流を生み出し、私の人生に大きい足あとをのこしている。

☆☆☆『卒業五十周年 私達の記録』閲覧ご希望の方は本館閲覧カウンターにお申し出下さい。

(374.75/KO1CA)

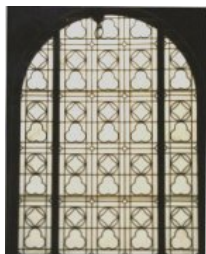
黒瀬百合子 院長室（84大E88）

「創立125周年に寄せて」

『神戸女学院の125年』という小冊子が刊行された。史料室の若山晴子女史が平成の語り部として、一貫して本文を担当され、全体の構成・デザインの細部に至るまで配慮を施された結果、それは小見出しだけを拾い読みしても小気味よく、興味深い読み物になっている。最近はやりのテンポが速く、情報量も増え、学院を取り巻く状況は楽観を許さない。その中であって、ゆっくりと後ろを振り返る余裕のない我々だが、こうして自らの過去を見直すことの重要性を改めて思う。様々な時代の流れの中で、学院がどのように発展し、その個性と伝統・文化を形造って来たかを確認することは、今後の学院を考える際、我々に確かな視点をあたえてくれる。学院が将来いかなる変容を遂げようとも、それは基本的にこれまでの伝統の流れと同じ方向性を持つものとなるだろう。学院の源流を辿ることをいつも忘れてはいけない。私が居る総務館をはじめ、先年の大震災を越えて残る学院の建物には、67年前の山本通から岡田山への移転を決断し、それを支えた人々の心意気が感じられる。現代の我々もまた、新たな英知と勇気と情熱をもって学院と共に歩み続けなければならない。

☆☆☆『神戸女学院の125年』閲覧ご希望の方は本館閲覧カウンターにお申し出下さい。

(374.75/KO1CM)



総務館階段正面大窓（ウィルソン記念窓）

新野緑 神戸市外国語大学教授 (92大E96GE98)

「図書館の顔」

いま思うと恥ずかしいけれど、学生時代に図書館を十分に活用したとは言いきれない。その頃は、石造りの旧館のどっしりとした佇まいや、閲覧室に漂うしんとした静けさ、そして革や紙のにおいに、奇妙な圧迫感を感じて足しげく通うことはしなかった。ただ、二階のギャラリーの居心地のよさは別で、冬の午後、窓から差し込む光の暖かさをぼんやりと感じながら、壁際のソファで友人とのおしゃべりをこっそり楽しんだ。

女学院の図書館が親しいものになったのは、むしろ卒業した後、ディケンズの書誌を作った時だ。予定された紙数から、とりあげる文献は七十年以降と定め、そのひとつひとつに短い内容紹介と自分なりの評価をつける。そのためにはできるだけ多くの本を網羅的に読まなければならない。ところが、七十年代の研究書はすでに絶版となり、手もとにないものも多い。勤務先の大学には関係の本が少なく、女学院を頼ることになった。

図書館には、必要な本が自動的に入っているように思われている。しかし、じつはそれは人の手で意識的に集められ、長い歳月をかけて蓄えられたものなのだ。だから、個々の図書館の蔵書には、著者や時代やジャンルに濃淡があり、購入した人々の見識と知的関心のありかがはっきり示されている。書架に並んだ豊かな蔵書を眺めながら、図書館の人となりを感じたのは、その時だった。

もちろん図書館が本当に生きるためには、購入した本を整理し閲覧を助けて下さる図書館員の方や、それを活用する利用者がなければならない。本を読む必要や欲求は、なにも在学中だけには限らない。ところが、卒業生にも在學生と同じように図書館を開いている大学は、残念ながら意外に少ない。その意味でも女学院の図書館は包容力があってあたたかい。新館を彩るステンドグラスの穏やかな光や窓の外の深い緑にふと目をやりながら、かつてギャラリーで味わったあの心地よさを、またしみじみと噛みしめている。

☆☆☆ディケンズの書誌＝「ディケンズ主要文献解題」、『ディケンズ小事典』に収録されています。閲覧ご希望の方は本館閲覧カウンターにお申し出下さい。(928/DI1F)

岡林典子 京都女子大学短期大学部初等教育学科専任講師（大M97、大C105）

「いま、母校に思う」

西暦 2000 年、わが母校神戸女学院は創立 125 周年という記念すべき年を迎えました。125 年という時の流れに思いを馳せるとき、多くの諸先輩によって受け継がれてきた女学院の歴史と伝統の重みを感じずにはられません。

私は音楽学部ピアノ科を卒業してから7年後、志し新たに家政学部児童学科3回生に編入し、2度目の学生生活を過ごしました。最近では生涯学習という立場から、社会人入学がめずらしくはない時代となりましたが、十数年前はそれほどではありませんでした。2度目の入学式の日、9つも年の離れた学生さんの中に30才を前にした私が入って、なじめるだろうかと不安を感じながら岡田山の坂を登りました。しかし、正門をくぐって目に入ってきた音楽館の建物が、「お帰りなさい。さあ、またがんばって!!」と、暖かく迎えてくれたように思えました。母なる学び舎の大きな愛とぬくもりを感じ、胸に熱いものが込み上げてきたのを忘れません。そして、それは今も私を支え、励まし続けてくれています。

児童学科在学中、漠然と音楽療法に興味を抱いていた私は、図書館新館で一冊の本に出会いました。山松質文著、『自閉症児の治療教育—音楽療法と箱庭療法—』。この本との出会いをきっかけに、音楽観が大きく変化し、音楽の芸術性の追求から、人のコミュニケーションにおける音楽のあり方などにも目が向くようになり、現在の研究テーマ、「文化の中で人と関わりながら育つ子どもの音楽的発達」へとつながりました。人との出会いと同様に、書物との出会いもまた、人生において意味あるものではないでしょうか。

いま、母校神戸女学院には深い感謝の気持ちを抱くとともに、21世紀に向けた更なる発展を強く願ってやみません。

☆☆☆『自閉症児の治療教育—音楽療法と箱庭療法—』閲覧ご希望の方は本館閲覧カウンターにお申し出下さい。(375.4/IW1/V.11)

徳重育子（大H114）

「図書館のこと」

私がお気に入りだった場所は、図書館本館の閲覧室です。ベランダ付きの大きな窓から中庭を眺めると、ヨーロッパの別荘に来ている気分になりました。本来図書館は勉強するためにあ

なのですが、私にとっては静かなリラックスできる空間でした。本を読む手を休めては、天井の幾何学模様(?)をぼんやりみていたものです。印象深かったのは、閲覧室の机が古い木製で、表面にボコボコ穴ができていたことです。机の上に直接紙を置いて書こうとすると鉛筆で紙をつきやぶってしまうので、下敷きが必需品でした。机としては大変不便でしたが、何十年前から使われ続けてきたものを大事に使い続けることは、歴史ある女学院には似合っていると思いました。ちなみに現在は、机が新しく塗り直されて、下敷きいらずになっています。女学院での四年間は山の上の楽園に迷い込んだような、おだやかで充実した日々でした。

<情報化社会における読書の楽しみ>というテーマで原稿をお願いしました。

柏木隆雄 大阪大学大学院教授 (元総合文化学科助教授:在職 1975-1983)

「未来の図書館」

ここ数年間の情報処理機器の発展はすさまじいものがある。図書館に検索用のパソコンがずらりと並びだしたのはいつ頃のことだろう。元来カードを引いて調べることさえおっくうだった者には、パソコンとなると一向不得手で、じつはまだ一度も検索のコードを打ったことがない。調べたいと思う本はとにかく書庫にはいって目当ての棚を探していく。こういう原始的な人間はいまどき数えるほどしかいまい。しかしいわゆる「書巻の気」というものは、こうして養われることもあるので、お目当ての本を探しているつもりが、つい横に並んでいる本に手を伸ばして、そのままうかうかと読んでしまうことになる。非効率といえば非効率だけれど、案外求めていた本よりもかえって調べもののヒントを得ることもある。自宅でも本の整理のはずが結局立ち読みばかりで一向にはかどらないのと同じだ。

これは極端に時代遅れな人間の話だけれど、いまや電子図書館の時代で、検索すればたちどころにずらりと参考書や蔵書がリストアップされるのには驚くほかない。そのうえキー一つ叩けばプリントも思いのまま。自分の論文の後ろにあっというまに参考文献として張り付けることも可能である。しかし、とまた考える。ワープロ、パソコンになって、手書きから解放され、まるで印刷したような文章がたちまちできあがるが、さて内容もすぐれ、書き上げる絶対的速度が早まったかというところでもない。かつて締め切りに追われたように、いまも締め切りに追われている。そのように、文献があっというまに出てきたり、手に入らないような文章を瞬時にわが論文にペーストしたとしても、手書きの頃の「出来」にどれほど革命的な進歩をあたえられたか、まことに心もとない。あっというまの処理は、あっという間の仕事しか保証しないのではないか。電子本、電子辞書はすいぶん便利には違いないが、ばらばらと頁をめくるうちに、求める単語と

はちがう項目の記事に読みふけり、つぎからつぎへと連想と興味がわく楽しみは、あっというまに目的の項目がでてスクリーンの中を駆け去っていく電子辞書の比ではない。もちろん沢山のサイトを一度にみたり、思いもかけない情報に向き合うこともないではないが、それにしてもヴァーチャルな違和感がそこにある。書籍という何千年も読書人たちに愛されてきた形態は、その表紙の意匠や活字の濃淡、紙の精粗をふくめていつまでも魅力あるものだろう。

電子図書館など知ったことか、革装や線装の本の並ぶ図書館よ、永遠なれ、と叫べば、『薔薇の名前』の頑陋な図書館長そっくりとそしられそう。ほどよい共存を願うのがほどよい知恵と言うものだろう。

☆☆☆ 『薔薇の名前』 閲覧ご希望の方は本館閲覧カウンターにお申し出下さい。

(849.43/EC1/V.1-2)

<研究室から>

谷 祝子 体育研究室教授

「今、もの思う秋」

ことのほか厳しい暑さが過ぎ、今はもの思う秋。ようやく動き始めた頭に浮かぶまま、これまでの私、今の私を書き連ねようと思う。

●基本の大切さ

今、あらためて思うことは、身体活動にはいかに基本が大切であるかということである。そしてその基本をもとに練習すれば、少しずつでも上に積み重ねられ、上達していくものである。もちろん幅を広げることも大切なことであるが時には原点に立ち返り考える。その繰り返しがレベルアップに繋がるのではないか。というのも、この夏、中国天津に郭福厚老師に太極拳（ひとつのことを極めるには最低 10 年一括りなどと言うが、私は細く長くをモットーに今日までやってきた）の教をを請いに行ったのだが、今回の旅で、今までの太極拳は何だったのだろう・・・という思いを強く持ったのである。それほど郭老師から基本の大切さを再認識させられた。身体にやさしい動き？自然に即した動き？身体に即した動き？何といったらいいのか・・・、とにかく長時間動いても、低い動作を何回も繰り返し下肢を充分使っているのに筋肉痛がしなかったのだ。膝や腰にも負担がない。練習をサボっていたわけでもない。太極拳をして膝や腰を痛めたという話はよく聞くことだ。おかげで研修も今までにない効果をあげることができ、郭老師のすばらしい太極拳の真髓を肌で感じることができた。郭老師は、以前本学に来学され、学生の前で太極拳の表演をし、研究所の専門研究会として講演もして下さったので覚えてられる方もあろう。

今、原点に立ち返り再度太極拳について問い直したいと思っている。

●2つのテーマ

20年にわたり、実践を通して授業のために暗中模索を繰り返すなかで今も、そして今後も続けたいテーマが2つある。

一つは先に述べた長く関わっている中国養生法「太極拳」。もう一つは「20歳児の身ぶり表現」である。

●「20歳児の身ぶり表現」とは？

当時私は、児童学科の幼稚園教諭免許取得のための「体育学」を担当していた。その折に、身ぶり表現を学ぶ学生に幼児の心を知らしめるために、学生自身を幼児にならせて表現活動をさせる授業をすることにした。その時に自然に生まれた言葉である。

●身体表現のビデオの記録について

身体を素材とする表現は伝えにくいものだ。その場で消えてなくなる。表現するその場において、その実際を見、感じていくものであって、後で言葉や文章にしても伝わりにくいものだ。その場にいるとその顔つきや息使い、雰囲気がよくわかる。そのあたりをビデオで何とか残したいと、保育室に入り込んで表現する子どもを長年にわたって撮ってきた。しかし、ビデオは記録には便利なものだが、100%すべておさめるということにはならない。同席していない場のビデオを後でいくら見ても、わからない。伝わってこない。同じ場においてその場を共有することがとても大切なことだ。ビデオも小型化し、軽量で持ち運びにも便利になった上にコンピューターで画像処理のできる時代だ。表現している場を少しでも多く記録して残したいものである。

●学生に望むこと

最近の学生たちはどのような幼児期を過ごしてきたのだろうか。“お受験”なる流行語の昨今であることを鑑みると、どちらかと言えば、「内面を育てる」ための身体活動や自然環境の中での遊びや文化的な遊びとはほど遠かったのではないか。

『幼児の内面を育てる』（広岡キミエ著 ひとなる書房）第一章の「はじめに」に、

子どもは見えないものである。

その肉眼が見えぬというのではない。それどころか萌え出たばかりの諸感覚はいたってみずみずしいので彼らの肉眼はよく見える。大人がうっかり見落としているようなささいなものまでも見ていたり、たえず新奇なものを求めてあたりをきょろきょろ見まわしているものである。だが彼らは見たものをしっかり心に止めることができない。その意味を理解できなかつたり、面白さを感じるができないのである。認識し、感動することにならないならば、それは内面を肥やすことにならず、見たということにならないのである。

たまたま、幼稚園期（3歳～5歳）には、その目や心が覚めだしてくる。これを助け導いて豊かにしようとするのである。

と書かれている。

このことは、幼児にだけ当てはまることではない。学生も同じだ。この自然に囲まれた岡田山に生活していて、何をどれだけ見ているだろうか。感じているのか。贅沢にも思えるほどの自然がいっぱいのキャンパスで感性を磨いてほしい。

●「身ぶり表現の研究」の原点

20年程前の夏季セミナーに初参加した幼稚園の先生が「表現とは何なのか、そのことを良く学んでくるよう言われてきた」と一番具体的で率直な質問をされた。それに広岡キミ卫氏（元本学児童学科教授）が講演の中で「表現とは何か」「身振り表現を何のためにするのか」語られたものである。

保育者「でんでんむしを見ます、でんでんむしはどんなふうにして這うでしょう？触覚はどんなのでしょうか？どんなふうな動きなのでしょう？そんな形や動きをよく分かってからその通りにするのです」

広岡「それは違います」

保育者「なぜですか」

広岡「でんでんむしというものはこういう格好をして、こうなっていますと分かっているならなんで表現をするのですか」

保育者「よく分かるからです」

広岡「そうしたら何でもしないとよく分からないのでしょうか。いったい分かるとは何でしょう。象だったら象みたいに大きくなって歩いてみないと象は分からないのでしょうか。分かっているのならしないでもいいのではないですか」

保育者「子どもは言葉であまり言えないから、だから身体でするのです」

広岡「皆さんもそう言われるでしょう。私もたどってきた道です」「赤いお花咲いている、あれチューリップや」とそんなことを言えない子がいますか。皆言えます。それをわざわざ赤い花になって「チューリップです」と何故するのですか。違うのです。「お花がとっても赤く咲いて

いた、揺れた、よかった、感じええわー」と、子どもがある種の感動を持つのです。

「チョウチョウとんでたわ」と子どもが言う「〇〇ちゃんのチョウチョウとんでごらん」と言ったら、ドタンドタンととぶ。「いいチョウチョウや」と言ってやると皆チョウがとんでいるのに関心を持つのです。「皆とんでごらん」と言ったら、とんでいるのかとんでいないのか、チョウかチョウでないか知らないけれど皆なこうやってドタンドタンととぶのです。その中で一人か二人チョウを思っているかもしれない、思っていないかもしれないけれども「チョウチョウや」というと子どもの心にチョウが残るのです。そうすると今度お庭に出てチョウがとんでいたら、今まで見えなかったチョウを思える子がある。そういうふうに子どもの心に入ってチョウが他人事でなくなり、チョウが自分のものになっていくのです。

私が身体表現に興味を持ち関わり始め、今もなお関わっていられる原点である。

●身ぶり表現で“夢”や“思い”を語る。—夏季セミナーでの実践—

広岡氏は、「表現とは、“夢”や自分の“思い”を語ることである」とも言われる。

今年の幼児教育の夏季セミナーでは『うみがめのおかあさん』というお話で“かめ”をテーマに、砂の中から生まれ出てくる子がめの表現、生まれて海に向かって砂浜を一生懸命に歩く子がめ、海の中を「こっちよ、こっちよー」ってどこからか聞こえる声に励まされながら泳ぐ子がめ、声に導かれながら海を泳ぎやっとお母さんがめに巡りあうことができた子がめ、どこからか聞こえた声はお母さんがめだった……というお話で幼稚園の先生たちが 20 歳児となって現して遊んだ。

お話で、自分の“思い”や“夢”をからだで語る楽しさ、動く楽しさ、心地よさ、周りの人々と感じあって動く喜びを言葉がけにより思わせながら、動きを引き出していく。そのために指導者自身がお話の情景を十分に思い描けることが大切なことである。

来年は何のテーマに出会うのか今から楽しみである。いいテーマに出会えるために、五感を全開にして自然と対話する心と、身体表現することで自己の思いや夢を表現する楽しさをいつになっても忘れないでいた いものである。

☆☆☆『幼児の内面を育てる』閲覧ご希望の方は本館閲覧カウンターにお申し出下さい。

(373.1/HI5E)

<Veritas図書コーナー開設期間延長についてのお知らせ>

Veritas11号で次号発行までとしておりました本館閲覧室<よみものコーナー>の<Veritas図書コーナー>、開設期間を12月まで延長いたします。引き続きご利用をお待ちしています。

<編集後記>

創立125周年記念号を10月12日の創立記念日にお届けすることが出来ました。お忙しい中原稿をお寄せくださいましたみなさまに厚く御礼を申し上げます。同窓生の方々の学院を思う暖かいまなざしに、励ましと新たなる使命感を与えていただいたような気がいたします。